

# 合自然的人生觀の克服

——プラトン「ゴルギアス」に於ける——

村 井 觀 亮

## 序

人は如何に生きべきであるか、という事は、プラトン哲学の根本問題であるが、今こゝに私の考察しようとする「ゴルギアス」の一篇も、プラトンの主著「ポリテイア」と共に、特にかゝる問題を深く取り扱つたものとして知られている。そこでのテーマは、雄辯術とは何ものであるか、という事であるが、結局プラトンの狙つてゐる事は、欲望を無制限に肯定せんとする合自然的人生觀を克服し、正義が支配し節制の行われる善美なる理想界を、魂の上に建設することである。勿論その完成はやがての「ポリテイア」に俟たねばならない。けれどもあらましの構想は、既に此の「ゴルギアス」に於て描かれているかの如くに思われる。そこで私は、ソクラテス（正しくはプラトンであるが）が此の「ゴルギアス」に於て、どのようにして合自然的人生觀を克服し、彼の理想とする善美なる世界を魂の上に建設して行つたか、之を以下少

し考察してみたい。

## 一

不正を行う事は悪い、という事の中には二つの問題が含まれてゐる。その第一は、不正を行う事は果して悪であるか、という事であり、その第二は、不正とは何か、という事である。第一問に於ては不正の善悪が問われ、第二問に於ては不正そのものが問題とされている。不正は我々に取つて望ましきものであるか、それとも厭わしきものであるか、というように、不正と我々行為者との間の關係が問題とされる時、それは自ら第一問となるが、行為者としての我々との關係を離れて、單に不正そのものが反省せられるに及んで第二問となり、問題は漸く核心に触れて来る。従つて不正の問題を根本的に解決しようとするれば、先ず不正そのものの考察から始めるべきであるが、然し人間に最も深い関心が持たれるのは、何といつても幸、不幸、又は善、悪である。従つて不

正の問題も、先ずその善惡、幸不幸から始められなければならない。「ゴルギアス」に於ける考察も亦、これから始まつたのである。

言うまでもなく、ソクラテスは不正を否定する。そして、幸福は教育と正義の中に在る。従つて美しく且つ美しき人々は凡て幸福であるが、不正にして邪惡なる者は凡て悲慘であると言ひ、更に進んで、不正を行ひながら裁判も受けず、懲罰もされない者は、之を受ける者よりも一層悲慘であると主張する。が之に対し、雄辯術の教師と称するゴルギアスの若き弟子ポロスは、當時の專制君主アルケラオスを引証して強く彼に反対する。アルケラオスは、近親を殺し位を奪ひ取る程のマケドニア最大の罪を犯したにも拘わらず、実はマケドニア最大の幸福者であつた。此の一例によつても既に明らかなように、不正を行ふ事は、不正を受ける事よりも幸福であり、又不正を行ひながら裁判もされず、罰をも受けない者は、之を受ける者よりも一層幸福である。ポロスは、このように主張し、兩人の説は完全に対立したのである。が然らばソクラテスは之を如何にして破つたであらうか。

彼は先ず、不正を行ふ事は不正を受ける事よりも幸福である、との説を破る事から始めるのであるが、その論破の要旨は次のようである。ポロスは、不正を行ふ事と、不正を受ける事との二つの中、いずれが一層惡であるかとのソクラテスの問に対しては、飽く迄も後者であると答えるが、いずれが一層醜であるかの問に対しては、前者と答へ、續いて美と醜との定義に於て、美は善であり、醜は惡であるとのソクラテスの主張に賛成する。従つて不

正が醜であり、又醜が惡であるが故に、結論は最早明瞭である。かくてポロスは、不正を行ふ事は、不正を受ける事よりも一層惡である、というソクラテスの主張に賛成せざるを得なかつたのである。

さて次の問題は、不正を行ひ不正であるにも拘らず、裁判も受けず懲罰もされない者は、之を受ける者よりも一層幸福である、というポロスの主張を破ることである。こゝでソクラテスが第一に着手した事は、正しき裁判は、裁判され懲罰される者に正しさを与える、という事を証明する事であつた。先ず二人の間に一致した事は、或る事を為す者は、為される者に、その為すところのものを与える。例えば打つ者は打たれる者に打つ事が為すような性質のものを与える、という事であつた。行為者と被行為者との間の、この様な關係が必然的なものであるとすれば、正しき裁判は、裁かれる者に、裁かれる事を通じて、必ず正しさを与える。所が先きの推論によつて既に明らかな様に、不正は醜且つ惡であり、正は美にして且つ善である。そこで結論として言ひ得る事は、不正を行つて正しく裁判される者は、正しく美しく且つ善きものを、即ち有益なものを与えられる、という事である。所で此の事は事実何を意味するかと言へば、不正を行つて醜を醜惡なものとなし、不正、放縱、臆病、無學、無知など、諸惡中の最大惡に満たされている者が、正しく裁かれる事によつて、此等の邪惡から解放せられ、邪惡とは反對のもの、即ち正義、節制、勇氣、智などの徳を得、従来の無秩序にして混沌たるものから、秩序正しき者となる。この様な魂は又幸福であるが故に、不正を行ひな

がらも、正しき裁判を受け懲罰を加えられる者は幸福である。之に反して不正を行い、又不正の人として凡ゆる邪惡を身に負いながら、正しき裁判も受けず、従つて亦何らの罰をも加えられない者は、他の何ものにも増して不幸であり悲惨である。

かくてポロスの羨望の的であつた無慚無愧の専制君主アルケラオスも、ソクラテスの前には、幸福どころか、悲惨極まる憐れむべき存在と化したのである。

以上のようにしてソクラテスはポロスの説を二つとも論破したのであるが、然らばその論破は果して正当であるか。先ずその推理の形の方から言へば、それは今日の所謂三段論法の形式を整え、正しき推理たるを失わない。ソクラテスは此の論法をロゴスと称し、甚だ得意とするところであつた。然し推理の正しさは、その形式のみによつては決まらない。形式が如何に完全であろうとも、若しそれを構成する各々の判断に誤りがあるとすれば、推論全体が誤つてくる事は言うまでもない。そこで問題は、推理を構成している一つ／＼の判断の眞偽である。先ず第一の推理では、(一)不正を行う事は醜である。(二)醜は惡である。此の二つの判断が果して正しいか、どうか。又第二の推理では、正しき裁判は、裁かれる者に正しさを与えるか、どうか。これが問題である。従つて私はこれら三つの判断の一つ／＼について批判検討すべきであるが、今私はこれらの問題を私の立場から一つ／＼解決する事が目的ではなく、寧ろソクラテスとポロスとの間に意見の一致を見たこれらの判断の意義を探り、ソクラテスのポロス克服が如何なるものであるかを知る事が私の当面の任務である。それ

のみではない。これら三つの判断は夫れ／＼三つの相異つたものではあるが、然し何れもその根本にはたつた一つの精神がある。そしてその精神は、第一の、「不正を行う事は醜い。」という判断に最もよく表明せられていられると思われる。それは此の判断が後程カリクレスによつて取り上げられ、新しい角度から根本的に再検討されていることにみても明らかである。これらの理由により、私は此の三つの判断の一つ／＼について検討することはせず、唯だ第一の判断についてのみ比較詳細に検討を加えることにする。

そこで第一の、「不正を行う事は醜である。」という判断であるが、これは一体如何なる意味を持つているのであるか。その前に、こゝに不当に思われることが一つある。それは、あれ程の惡虐無道の専制君主アルケラオスの幸福を羨望し、不正をも善しとするポロスが、一体何故に一言の異議をもさしはさまず、不正を行う事が醜であると答えたか、という事である。が、これには訳がある。結論から先きに言うならば、それはポロスにも未だ社会的規則を認める道德的通念があつたからである。彼はアルケラオスを羨む程の不屈者ではある。けれども彼がまだ不正そのものをも否定し去る程には至つていない証拠には、アルケラオスの非行を評して、「それは勿論不正ですとも。彼が今握つてゐる統治權は、彼のものではある筈がなかつたのです。」(1)と言つてゐるのを見ても明らかである。彼はアルケラオスの非行を不正であるとは言つたが、決して正しいとは言わなかつた。人を殺すという事、又統治權を奪い取るといふ事、これらの事は彼に取つては問題な

く不正なのである。勿論或る行為の正、不正が評価される以上、そこには必ず何らかの評価の基準がなければならぬ。彼はそれを何処に求めたかと言え、それは既成の社会的規則である。誰しも承認すべき筈であるところの、又筈であつた所の一定の規則、これを彼は評価の基準にした。アルケラオスの非行は何故に不正であるかと言え、彼の今握っている統治権が、元来彼のものである筈がなかつたからである。ポロスに取つては、「彼のものである筈のもの」と、「彼のものではない筈のもの」とのけじめが、既に出来上つたものとして存在している。それを見て、正不正と評価するのである。ポロスは不屈者ではある。けれ共此の様なけじめをまだ忘れはしなかつた。彼は結局道德的通念の所有者であつたのである。不正は醜である、という率直な言葉は、この通念の端的な表現に他ならない。

然しこゝに問題が生ずる。若し彼が道德的通念の所有者であるならば、何故に彼は最初から不正の悪である事をあつさり承認しなかつたのであるか。何故にわざ／＼醜の概念をまで引き出させ、それを媒介とすることによつて初めて之を承認したのであるか。想うに、元来善又は悪は、我々の現実的生活と直接に結び、それはそのまゝ我々の幸、不幸でもある。そこで不正の善悪が問われたのではポロスならずともそう簡単には答えられない。現実的な打算が入るからである。所がこの様な善悪から離れて、生活とは直接的には何の關係もない美又は醜が問われる時には、こゝに人は初めて自由となり、率直に自己の所信を表明することが出来る。

不正が悪であるとは容易に言わないポロスが、それが醜である事には無條件に同意したもう一つの理由がこゝにも考えられる。つまりソクラテスがさり気なく投げた一語「醜」という言葉は、それまで善悪の観念に支配せられて硬化していたポロスの魂を解きほぐし、ポロスをして図らずも本音を吐かしめる誘いの緒口となつたのである。そしてこれはやがて彼がソクラテスの軍門に降り、同門の士カリクレスの憤激を買う原因ともなり、再び問題の焦点に置かれる事となるのである。そこで私は別な観点から、もう一度これに就いて考えてみたい。

ポロスは、ソクラテスの巧みな誘いの手にかゝり、図らずも本音を吐いて、不正は醜である、と答えてしまつた。彼は外見に似ず、内心は不正を不正とする道德的通念の所有者であつたのである。所がこの道德的通念が、やがてソクラテスのポロス攻略の重要な足場となつたという事実は、一体何を物語っているかといえ、それはかゝる通念が通念である限り、單にポロスのものばかりではなくて、同時にソクラテスのものでもあり、全ギリシャ人のものでもあるという事である。かゝる共通地盤の上に立つたればこそ、ソクラテスは流石のポロスをも降し得たのである。が然らばかゝる地盤とは一体如何なるものであつたか。言うまでもなく、それはギリシヤ民族共通の美的宇宙観である。周知の通り、由来ギリシヤ人の宇宙観人生観は甚だ美的であつた。彼等に取つては宇宙は完全なる球であり、秩序整然たる統一体である。そしてそれは美でもあり、善でもある。之に反して混沌は無秩序であり、不正にして醜、且つ悪である。かくて一方には完全なる

ものとして、正、美、美の宇宙<sup>コスモス</sup>があり、他方には不完全なるものとして、不正、悪、醜の混沌<sup>カオス</sup>がある。この混沌をどう処置するかは、それ自体大きな問題であるが、兎に角かゝる宇宙観は古代ギリシャの凡ての人々を一応支配した一つの民族的精神であり、彼等の通念でもあつた。彼等の多くの芸術も哲学も、結局かゝる通念の客観的表現とも見える。ソクラテスがかゝる宇宙観人生観の上に立つてゐること勿論であるが、ポロスと雖も結局同様であることは、彼の図らずも洩らした言葉によつても察知せられる。たゞ彼は、ソクラテスが斯る宇宙観を飽くまでも徹底し、自然、就中人間を此れによつて観、無秩序混沌たるものに一定の秩序と形相とを与え、凡ての行動を規律あるものたらしめようとするに反し、今漸くこれを自己の内に氣付かしめられた程度であるというだけである。けれども此れに氣付いたればこそ、彼はソクラテスの理論にも恥じ、男らしくその軍門に降つたのである。して見れば、ポロスに対するソクラテスの勝利は、アルケラオスの非行を不正とするポロスの魂に僅に残存する道徳的通念の勝利であり、もつと根本的には、不正を醜惡とし、正を善美とする、ギリシャ固有の美的宇宙観人生観の勝利であり、飽くまでも之に徹しようとするソクラテスの理性の勝利である、と言うことが出来る。

かくて勝利の栄冠はソクラテスの頭上に輝く。そして其れは、ギリシャの美的宇宙観や道徳的通念が妥當する限り、そして又理性が理性として健在なる限り、永遠にソクラテスのものである。けれども此等が反省せられ批判せられ、却つて此等によつて無視乃至輕視せられている混沌に眼をつけ、そこから更めて、正

義そのもの、不正そのものが問われるに及んで、問題は全く深刻複雑なものとなり、勝利の栄冠は必ずしもソクラテスのものとは言えなくなる。が然らば今ソクラテスから栄冠を奪い取ろうとする者はそも／＼誰であるか。それは初めの勢いにも似ず脆くも敗退したポロスの後を承け、自然に従う正義を強調したカリクレスである。

## 二

かくて今や我々は、カリクレスの自然に従う正義を聴くべき秋となつたのであるが、その前にソクラテスの反自然、反現実について一言しなければならぬ。ソクラテスの説が、前述のように理性の立場から、秩序無き混沌に秩序と形相とを与えんとするものなる限り、それが自ら形式的抽象的となり、具体的内容が無視乃至輕視し、現実から徐々に離れて行く事は、その理論の生い立ちからしても既に明かであるが、これを如実に証明するものは、ポロスを敗つた直後に語られているソクラテス自身の言葉である。

彼によれば、我々や我々の両親、友人、子供らが、若し不正を行つたとすれば、我々自身が自己や彼らの告発者となり、その不正を暴露して裁判や懲罰を受けさせるべきである。が若し誰かを冷遇しようとするならば、敵であろうと誰であろうと、彼らが不正を行うがまゝに委せ、彼らが裁判をも罰をも受けない様、万善を尽すべきである。彼は此の様な事を語つてゐる。ソクラテスの理論からすれば当然の事であるが、然し何という反自然、反現実であらうか。理論と現実との此の様なかけ離れについては、勿論ソ

クラテスは我々の無知を指摘して、現実の虚妄なる所以を教えるであろう。けれども我々の現実や内外の自然は果して彼の言う様に單なる影像や虚妄に過ぎないものであろうか。否な、ソクラテスの描く世界こそ虚構ではないか。眞理はかゝる人為的なものではなくして、却つて作為無き自然、あるがまゝの事実にある。無知は我々のものであるよりは、寧ろ彼のものではないか。

ソクラテスの全く自然を無視した現実離れの説を聴く時、我々は此の様な疑問を起さずにはいられないのであるが、カリクレスも亦、開口一番先ずその非現実的なに呆れ、続いて自己の自然主義的人生觀を次ぎの様にまくし立てた。ポレスがソクラテスのあの様な暴論にも屈せざるを得なかつた唯一の原因は、不正を行う事は不正を受ける事よりも一層醜い、と言つたからである。けれども正義や不正は、之を自然の立場から見ると、それとも法（法律・習慣・道德律など、要するに凡ての社会規則）の立場から見ると、全然正反對のものとして現われる。若し自然に従つて見るならば、不正を受ける事の方が、不正を行う事よりも醜い。不正を受ける様な境遇は、堂々たる男子の境遇ではなくして、生きているよりは寧ろ死んだがましの奴隷の境遇である。奴隷は如何に迫害を受けても、自分では之をどうすることも出来ない。法はかゝる弱者の制定したものに過ぎない。彼らは自己の利益を擁護せんがために、多数の力を結集して、「他人よりも一層多く取る事は醜であり不正である。」と定めたのである。所が同じ此の事も、若し自然に従つて見るならば全然反對のものとなつて現われる。自然は我々に何と教えているか。それは、優者が劣者よ

りも、又有能なる者が無能なる者よりも、一層多く持つ事が正しい、という事ではないか。動物の世界や人間の社会、歴史を見よ。そこを支配している法則は、優者が劣者を支配し、又より多く所有する、という事である。論より証拠。クセルクセスのヘラスへの進軍やその父のスキアへの進軍は、凡て自然の法則の教えるまゝに行われたのであつて、決して人為的な法に従つたものではなかつた。強者の前には最早人為的な法は無く、あるものは唯だ自然の正義のみである。

カリクレスの主張の要旨は右の様であるが、然しそこには尙お幾多の曖昧なところがある。けれどもこれはソクラテスとの問答によつて段々と正確なものとなつた。先ず彼の所謂優者とは、「国事に関して思慮を有し、且つ勇敢な人である。」従つて自然の正義とは、かゝる人が一国の支配者となり、被支配者からより多く搾取する事である。勿論かゝる人には節制や克己の徳は必要ではない。優者は愚者の眞似をして欲望を制禦するなどの事はせず、却つて自己の欲望を出来るだけ大きくまゝに放任し、智と勇氣とを以つて出来るだけに奉仕するからである。従つて勇者の徳は、節制とは正反對の贅沢、放縱、自由であつて、幸福は正にこゝに在る。自然に於ける優者の生活は、結局放縱の一語に尽きる。

カリクレスの言わんと欲するところは、此れで全く明瞭となつた。ソクラテスの主張に疑問や不満を覺えた我々は、カリクレスの此の様な大胆率直な意見を聴き、窮窟な理論の世界から解放せられて、自由世界に抛り出された様に覚え、又無味乾燥な人生に明るさと楽しさを取り戻したかの如くに感ずる。成程ソクラテ

スの描く人間像は、アポロの神像の様に清澄端麗であり、その上ゼウスの冒すべからざる威厳をもそなえている。がそれ故にこそ、却つて我々には近づき難きものともなつてゐるのである。我々の祭神はアポロやゼウスではなくて、寧ろディオニソスではないか。理性や愛智はたしかに我々の内にある。それを否定し去ることは人間の否定に終るであらう。けれども自然にそなわる欲望は、理性や愛智よりも更に一層深いところに根ざして、我々の「氣高い本性」のなしているのではあるまいか。その何であるかは、まだ分らない。が、たしかにそれは生命と直接につながつてゐるものゝようである。この様な自然、欲望に従つて思ひのまゝに自由に生きる事こそ優者の生き方ではあるまいか。

カリクレスの合自然的人生觀は、かくの如く我々の魂をゆさぶる、大きな魅力を以つて我々を誘惑するのである。理性か欲望か。節制か放縱か。アポロかディオニソスか。こゝに我々は、人生を如何に生くべきかという、人生最大の問題に直面したのである。若し我々が黄金を持つてゐるとすれば、それが本物であるかどうかを試すに絶好の機会である、とここでソクラテスは述懐しているが、然らば彼はどのようにしてそれを試したのであらうか。

自然を重んじ欲望に奉仕する放縱の女神はヘドネ（快樂）である。放縱礼讃者にとつては、快樂こそが人生唯一の目的である。彼らが一切の欲望に奉仕する所以のものは、それによつて快樂を得んとするからに他ならぬ。放縱と快樂とは常に一に結びついてゐる。否な、放縱主義は同時に快樂主義である。そこで今若し放縱を批判検討せんとするならば、先ず快樂の何であるかを明らかに

にし、その正体を把むことである。カリクレスの徹底的な合自然的的人生觀を克服せんとしたソクラテスが、攻撃の矢を先ず快樂に向けたことは寧ろ当然である。

ソクラテスは、人の幸福は足ることを知る平靜なる生活の中に在ると言うが、カリクレスをして言わしむれば、かゝる生活は石の生活である。我々の選ぶべき生活はかゝるものではなくして、凡ゆる快樂を持ち、その何れをも充たしながら喜ぶ歡樂の生活でなければならぬ。無論かゝる生活には苦痛が伴うであらう。けれどもそれと同時に常に必ず快樂も存在するのである。

所が快樂と苦痛とが同時に存在するかゝる歡樂の生活が、果して善き生活であり得るであらうか。由来放縱主義者の一様にいだく誤謬は、快樂は即ち善、苦痛は即ち惡、としてゐるところにある。然しこれらが決して同一でない事は、快苦が、例えば饑えて食し、渴して飲む時に我々の經驗する様に、同時に生じ同時に在り、又同時に滅する事があるに反して、善と惡とは、例えば善人が同時に惡人である事も、又惡人が同時に善人である事も全く不可能である様に、決して同時にはあり得ない。という此の一事によつても明らかである。が、若しこの説明だけで不十分であるとすれば、「ピレボス」篇で説かれてゐる様に、快樂苦痛は情態として無限であり無規定であるが、善と惡とは概念として常に有限であり規定的である、と考えるならば、これは一層明瞭になるであらう。

さて快即善、苦即惡の説が誤り、従つて凡ての快樂がそのまゝ無條件に善ではないとすれば、或る快樂は善であり、或る快樂は

悪であることになる。が然らば快樂にかゝる區別を与えるものは何か。それは益と害である。例えば健康という益をもたらす快樂は善き快樂であるが、病氣という害をもたらす快樂は惡しき快樂である。苦痛についても同様の事が言われる。

かくて快樂と苦痛とは、各々有益にして善きものと、有害にして惡しきものの二つがある事となつた。所で若し我々が之を選ぶとすれば、その何れを選ぶであらうか。誰しも先ず有益なる快樂を選択して有害なる苦痛を捨てるであらう。快と善とが、そして又苦と惡とが幸にも一つに結合しているからである。然しかゝる結合のうまく行つていない有益なる苦痛と、有害なる快樂とに於ては、選択は必ずしも一様ではない。益や害の有無よりも、従つて亦善惡の如何よりも、快苦の有無が先ず第一の関心事となるからである。現に快樂主義はその徹底的なものである。そこで問題は漸く快樂の中心問題に觸れてくる。我々の求める対象は善であるか、それとも快樂であるか。抑々我々の意志し行爲する所以のものは一体どこにあるか。

我々は之を卑近な例について見よう。一体我々は何の爲めに歩くかというに、それは歩くことが我々に取つて有益であるからである。故に若し歩くことが無益又は有害であるならば、我々は決して歩くことを為さないであらう。この様に見れば、我々は決して單純に歩くことを目的として意志するのではなくして、歩くことのもたらす或る有益なるものを目的として之を意志する、と言ふべきである。かくてソクラテスも言う様に、「誰かが何かのために何かを為すとすれば、その為すところのものを意志するのではな

くして、何かのためにそれを為す、その何かのものを」の意志するのである。換言すれば、一切の意志行爲の目的は善であつて、その爲めにこそ他の一切のことが為されるのである。果して然らば、善と快樂との關係も亦自ら明瞭である。即ち善き事の爲めに快き事が為さるべきであつて、逆に快い事の爲めに善き事が為さるべきものではない。飲食は健康の爲めにあるのであつて、逆に飲食の爲めに健康があるのではない。

かくして善は、我々の一切の意志行爲の目的となり、従つて亦快樂の目的ともなつた。先きには快樂と區別された善も、こゝでは再び目的として快樂に結合されたのである。従つて快樂あるところ必ずその目指す目的がある。それが善であるが、然し世の多くの人々は、目的としての善には盲目であつて、唯だ眼前の快樂のみしか見えない。かくて彼らは日々夜々の快樂狩りにあくせくしている。而してかゝる大衆におもねり、彼らに出来るだけ多くの快樂を与えようとして現われたものが、例えば料理法であり、美容術である。笛吹きや琴弾きの術なども此れに屬する。これらはそのおもねる大衆に似て善のあることを知らず、唯だその淺薄なる經驗知を以つて、諸の快樂の製造には多忙であるが、大衆の一層善くなることについては全然無関心である。此の点に於ては世の所謂政治家とても同様である。否な、それ以上でもある。彼らは口には國民を出来るだけ善くすると言いながら、その實國民に迎合してその歡心を得ることのみ力め、一身の利益のためには公事をも忽にし、それによつて國民が如何に惡くなるかについては一向に無頓着である。成程例外としてテミストクレスやペリ

クレスなどが挙げられるであろう。彼らは国政に尽力し、その善政によつて国民の福利を増進したと言われている。けれどもその福利とは一体何か。若しそれが船や城壁を造つたり、貨幣制度を創めたりすることであつたとすれば、結局それは国民の欲望を満したというだけであつて、国民を本当に善くし本当に幸福にしたことにはならない。それどころか、若しそのために国民が却つて怠惰にでもなつたとすれば、それこそ彼らはその責任者でなければならぬのである。

かくの如く国民大衆も、これを指導すべき人々も、凡て美を忘れて快樂の追求に耽つている中に処して、眞の政治家（現実には仲々見当たらないが）は如何様に政治をするであろうか。彼は国民の眞の最善を目指して語り、且つ之を実行する。がその最善とは何か。それは恰も画家や建築家はその知識に従つて画を描き家を建てるに際して、諸の部分を出たらめに寄せ集めたりはせず、集められた各々のものが互に所を得、互によく調和し、結局全体として秩序や統制のある一つの全きものに構成せられる様にする、又医者や体育教師が医療や体育理論の知識によつて、身体に秩序と統制を与え、強健なる身体を作る、この様にして眞の政治家も魂に秩序と統制とを与えるのである。而して秩序と統制とを得た身体には、健康と強健という名前が与えられている様に、「魂の秩序と統制には、合法と法という名前が与えられており、これから魂は合法的なもの、統制的なものとなる。そして此れが正義と節制なのである。」<sup>(4)</sup>

国民の最善を願う眞の政治家の目標は、かくして合法的にして

且つ統制ある魂、即ち正義と節制とである。この二つを目標に置きながら、語るべき事は語り、実行すべき事は実行する。そして国民に若し与うべきものがあるならば、之を与えるに決して吝ではない。が然し没収すべきものがあるならば、これも容赦なく没収する。けだし私心をいだかず、国民の歡心を得ることをも欲せず、唯彼らに最善を与え、一切の惡を除去する事を唯一の念願とする彼らは、合法的にして且つ統制的なる魂が全く善き魂であり、之に反して無智にして放縱、不正にして不敬虔なる魂が悪しき魂であり、従つてかゝる魂に取つては、恰も病人には健康恢復のために、有害無益なる飲食が医者によつて禁ぜられる様に、これらの一切諸惡の根源たる有害無益なる欲望から遠ざけられ、一刻も早く秩序と統制とを恢復し、合法的にして且つ統制的な魂、即ち善き魂として再生することが、何よりも先ず必要であることを熟知しているからである。

国民の最善を願う眞の政治家が、その最高なる智慧に従つて最善なりと目する最善とは、かくして秩序と統制のある魂、即ち正義と節制とである。かゝる魂は、人事に関してのみならず、神々の事に関しても、その為すべき事は必ず為す。人事に関して必ず為すべき事を為す魂は正しき魂であり、神々の事に関して之を為す魂は敬虔なる魂である。かゝる魂は又勇敢でもある。けだし思慮あり節制ある者は、追うべからざるものを追う様な奮勇の持ち主でもなければ、又避くべからざるものを避ける様な卑怯者でもなく、人事の一切に於て追うべきものは飽くまでも追い、避けるべきものは靜に之を避け、又止まるべき時には何事にもよく堪え

て忍び止まるからである。かくして節制ある人は正しき人であり、又敬虔にして勇敢なる人でもある。而してかゝる人は、他の如何なる人々にもまして善き魂の人であり、常に美しく善く行う。即ち幸福である。之に反して惡しき魂の人は、惡しく行い、不幸であり悲惨である。而してかゝる人こそ節制の反対、即ち放縱の人なのである。

かくて若し我々が幸福を望むならば、出来るだけ節制を求めて放縱を追放しなければならぬ。放縱は諸の邪惡の根源であるからである。若し不幸にして諸の邪惡を負い、懲罰される必要があり、而も幸福を求めるならば、一日も早く裁判を受けて諸の邪惡から解放さるべきである。欲望の動くがまゝにみだりに行動し、無闇にその満足を求め、極惡無道の盜人の如き生活をする者には、共同心もなければ友愛もなく、従つて他人からも神からも愛されない様になることは必然であるからである。

かくて最善なる魂は、友愛あり共同心あり、且つ節制と正義の徳を有する魂でなければならぬが、かゝる諸の徳は、單に人間だけの徳ではなくして、實に天地神人共通の徳なのである。「天と地と神と人とは共同心を持ち、又有愛・統制・節制・正義を持つてゐる。」<sup>ゴスモス</sup>とさればこそ昔から賢人達は天地神人の全体を「宇宙」と呼んだのであつて、之を決して無統制とも放縱とも言わなかつた。従つて神々の間に於ても人間の間に於ても有力な事は、幾何學的平等であつて、他人よりも一層多く取る事では断じてない。

自然の正義に従い、欲望の起るがまゝにこれを満足させる放縱

生活を謳うカリクレスの合自然的人生觀の克服は、かくてこゝに一段落がつけられる。今そのあとをかえりみるに、それは先ず放縱の女神快樂<sup>ヘドネ</sup>の觀察から始まり、快樂の眞相が明らかにされた。そしてその結果快即善を信ずる快樂主義者の謬見が打破せられ、或る快樂は善、或る快樂は惡、という事になつた。所で善き快樂は有益であり、惡しき快樂は有害である。我々の欲求し選択するものは、後者ではなくして前者であるが、こゝに問題となるのは、我々の意志行為の目的である。快即善の謬見に執われている快樂主義が、我々の意志の目的を快樂に置く事勿論であるが、これに関する検討の結果、我々の意志行為の目指すものは、快樂ではなくして善であることが明らかとなつた。所が一般の大衆や、大衆に媚びるおもねり術の人々は勿論、世の所謂政治家と雖も、人間一切の営みの目的たる善の存在する事を知らず、たゞ眼前の快樂にのみ奉仕している。かゝる中に処して眞の政治家は、快樂には眼もくれず、唯だ最善を目指して国民の魂を善美なものとする。かくしてカリクレスの礼讃する女神ヘドネは諸惡の根源として追放せられ、その代りに合法と法とが与えられて、魂はこゝに全く正義と節制の支配する善美なる魂となる事が出来、勝利の榮冠は依然としてソクラテスの頭上に輝くことゝなつた。

然し問題はこれで決して終つたのではない。ポロスは簡単に引き退つたけれども、カリクレスは決して容易には屈しない。ソクラテスの例のロゴスの前には一応沈黙させられたものの、内心は決して諒承していない。問題の深刻さがこゝにもよく表現されている。形式的なロゴスだけでは、欲望は容易に納得しないのである。

そこで私は最も問題の多い「自然」と「法」とについて、もう一度考察してみたい。

カリクレスによれば、何が正義であり、又何が不正であるかは、自然に従つて (*Kata physin*) 見るか、それとも法律習慣道徳律などに於ける法に従つて (*Kata nomon*) 見るかによつて全然正反對のものとして現われる。例えば他人よりも一層多く取るという事は、優勝劣敗の法則が行われている自然に従つて見れば、別に不正でもないが、弱者の制定した法から見れば不正である。けだし弱者は、優者に対して自己の利益を擁護せんがために、多数の力を結集して法を制定したからである。かくて、自然と法とはカリクレスに於ては完全に背反することゝなつたのであるが、これは果してそうであろうか。ソクラテスによれば、(「ゴルギアス」に於ける彼の意見から推して) 法はカリクレスの主張する様な、利己的な多数の劣弱者が、利己的動機から勝手に制定した單なる契約の如きものではない。法が若しかくの如きものであるならば、それは權威なく、従つてかゝるものに従う事は不自然 (*para physin*) であり、カリクレスの言う様に甚だ男らしからぬ惨めな様であろう。所が眞の法は決してかゝるものではなくて、賢人の制定したものである。彼らがそのいとも勝れた叡智によつて、最善を遙か高き所に望み見、之を範型として地上の人の魂の上に実現したもの、それが正義であり節制である。法はかくして生じたのである。高き所とは宇宙である。天地神人の全体として、秩序と統制とを有する宇宙である。従つて法の根拠は決して多数の弱者の利己的な恣意にはなくして、宇宙にある。成程

賢人が制定した所から言えば、法はたしかに人為的である。けれども彼らによつて制定せられた法が、彼らの己を空しうした叡智によつて、宇宙さながらの秩序と統制とを与えられたものであるという点からすれば、法は同時に宇宙のすがたを現わしている。

従つて若しかゝる宇宙を自然と呼ぶことが許されたとすれば、法は一つの自然であると言うことができる。かくて法は人為的であると共に自然的である。従つてかゝる法に従う事は自然に背事ではなくて、寧ろ自然に合する事である。合法は同時に合自然でなければならぬ。「他人よりも一層多く取るべからず」という法が、若し神々の間に於ても人間達の間に於ても妥当する幾何学的平等の原理の現われであるとすれば、みだりに他人よりも一層多く取らない行為は、人道に合致するのみならず、又天地の公道に合する所以でもある。又此れとは反対に、法に背くことは自然に背くことであり、不法は同時に不自然である。アルケラオスの数々の不法行為は、法の立場からのみならず、自然の立場からみても不正であり醜惡である。東洋の所謂天人共に許さざるところなのである。(法と自然との此の様な合致を強調して行けば、やがて自然法の概念にまで到達する。)

かくて法と自然とは一致し、法即自然、自然即法となり、カリクレスの提案は破られたのであるが、結局これは宇宙(秩序・統制)の混沌に対する、又は理性の欲望に対する勝利である。我々も亦この輝かしき勝利を認め、互に人間の光榮のために、否な一切のためにも祝福すべきものである。

ソクラテスは人間其他の一切の動物事物の善について語つてい

る。此れら一切の者が善であるのは、それが各々固有の徳を有するからである。がその徳は、道具のものも身体のものも、又動物のものも魂のものも、「偶然によつてではなく」「夫れ／＼のものゝ内に植えつけられた夫れ／＼のものゝ本有的な一つの秩序」〔6〕によつて秩序づけられ統制せられる時に、夫れ／＼のものに現われる。

これによつても察せられる様に、我々人間が人間として今此処に存在する限り、我々には必ず人間独自の徳が存在する。何も高度に発達した人間についてのみ考える必要はない。唯だ人間であるという最低程度の人間について見ても、それが苟も健康な普通人である限り、彼には必ず人間としての日々の起居動作を秩序づけ統制するところの秩序や規則なるものが、仮令最少限度とは言え、固有なるものとして存在している筈である。若しこれが存在しないとすれば、その人は最早人間ではなくして他の何者かであらなければならない。かくて秩序や統制は、人間には人間固有なるものとして存在し、それによつて彼らをして人間たらしめていると言わねばならない。それが具体的には如何なるものとして現われているか。それは既に明らかである様に、智慧・正義・節制・敬虔・友情心・共同心などの徳である。これらの徳を持つことによつて初めて、人間らしき人間として、ソクラテスの所謂善美なる人間として我々はこゝに存在し得るのである。従つてこれらの徳は、人間をして人間たらしめる人間の本質又は本性であり、人間の勝義に於ける自然でもある。人間の本質と自然とはこゝに於て一致する。（ギリシヤ語に於ける自然に本質という意味も含ま

れている事は意味深い）従つて人間は、正義や節制などの徳を魂に持ち、放縱に陥らず、正しくつゝまじやかに生きることによつて、最も人間らしく、又最も自然に相応しく生きることが出来、合法と合自然とはこゝに完全に一致する。が之に反して欲望のまに／＼動き、無秩序無統制の混沌たる放縱生活に陥ることは、人間失格であるのみならず、自然の大道をも外れることとなるのである。

#### 引用書

(1)	Platonis opera. gorgias.	472
(2)	"	485
(3)	"	467
(4)	"	504
(5)	"	509
(6)	"	506